



13
3416
38

南總里見八犬傳第七輯卷之七

東都 曲亭主人編次

第七十二面

仇を謬く奈四郎頭顱を奪る
容を畠く次團太鬪牛を誇る

却説四守の城を還り。元年も宴をうづ。指月院を起す。住持の允僧を知り。國中の士民渴仰し。活菩薩と稱する。虛名あらば。況彼二大士の面魂實は一人。當千の勇士渠も意を固む。をよ勤仕を推辞する。間もなく物を贈り。日ふ月は恩を積む。竟か心を傾け。當家を隨後まことに。就て木作が後家夏引の良人を害せぬ。密夫奈四郎が木作を殺せよ。と。豈る隠して惡事を資へ。が。良人害せふ。下當か嚴科を行ふ。又奈四郎が後僕帳内も月比の惡を資

松也
猪ノ右院

けく盜竊残刃心せざること。これ亦頭を刎ぐのみ。只彼木ユ作が小廝出来
矣。奈四郎夏引ホガ惡事を知る。魯く夏引謀れ。信乃を誣んとす。
是。是が爲あ罪ふ輕重あり。夏引ホと同トかば渠共一百鞭。國境より追
去。是が爲あ餘の事。如此々々と言。捉ひ。大元元年を奉す。形のこみふ行ひ。
ゆき。夏引幅内ホハ身首処を異なせ。戸を市に垂れ。食ふ狗を肥す。隠
匿の報ひ怕る。かゞ一程の猿石ある。村の故老の百姓ホハ大元の下知を受て木ユ
作が亡骸を村人小昇り。指月院ふ送り。あむければ、大法師受とろ。も宵火
葬ふき。登時信乃道節照文ホハ木ユ作が死後へ名迹を併の百姓们と
商量。親族の子を索ゆる猿石の鄰村。四六城氏の百姓。則木ユ作が養
ふ。五世前不分れる血脈相續の氏族。是も今。送ふ疎遠。四六城
氏。二箇の男子あり。次男を才あり。文筆を好み。ある日。三犬士

照文ホ給ひ。濱路姫ふ云云と。あれより。告まつて。木ユ作。白骨を半分
ちをの一壺。西六城の香華院へ葬らしめ。即便鄰村。四六城氏の三男。そ
本ユ作。名迹。と約束され。より故老の百姓们が媒妁して。件の二男を
呼び。迎へ。名を木ユ作と更。養父の家を嗣。けつて。前の木ユ作は仕。奴婢
を。も。うち。まのち。むく。ち。木ユ作。よ。も。う。る。き。と。呼。い。迎。へ。名。を。木。ユ。作。と。更。お。養。父。の。家。を。嗣。け。つ。て。の。前。の。木。ユ。作。は。仕。と。奴。婢
霄。大照文。相譚。姫。情願。締。十二分。成就。これが。この地の道風
矣。何と。されば。國主信昌。至を愛する良ねえ俺们を。單に爲ふ悪々と。遍
々。是。が。の。恩。竟。か。西。禡。と。さ。く。立。き。う。難。あ。べ。只。の。悪。益。多。先。ふ。他。御。避。泥
塗。ある。蟹崎生。の。譏。ふ。就。く。姫。う。の。充。供。と。多く。安。房。へ。や。り。多。猶豫。其
必。後。悔。あ。ら。と。ま。大。も。照。文。の。異。譏。ふ。及。至。領。を。二。天。大。意。見。悪。意。懲
る。ま。今。よ。起。行。の。准。備。を。せ。と。応。累。そ。や。立。と。せ。照。文。を。道。節。急。ふ

推禁ひなく且俟々。ひあり俺们も羽立未明ふ共侶立去く相模武藏せ盡て
ぬまも姫うを送りまゐる。よそと夥兵七名を三人ひあま遣へ置く四人を姫うふ
隸え俺们之地を去るとひども莊助がうち遠る。彼七ヶ國の中ひわん然せ庄助
ひも下の處へひつ来る。欲成れ火急の要支ある。とお夥兵三名を走らす言速
達モ。ひ豫々俺们が商量ちる所。とお照文あらうをめぐる彼夥兵七名大
きの非常え備へよとく五吉君の隸ませ。四人、五人を留るとも肩ヨヌとまうだ。
左ゆも右ゆも各々の便宜ふ任へ。某は下先路をゆふ。相模略ふ勢をく。
鎌倉より舟行ふ。安房へ届く。然りけれ。海上の風濤の難を測
ひ。道徳へ何と云ひ。と向ひ傷をなされ、大へ頭をうち掉く路を食るよと
禍あり只武藏より下總を過ぐ。上總ふ到るを頗路とて、遠近を争ひ。
時よりさうにひき。とおは又信乃も諫せ。姫うは俱なりて海上の好く。

遠くとも陸を薦めへとお照文則そお議ふ任へ。瀬路姫ふ云云と縛の趣を告
き。ひ。の夜主役起行の準備ひ。晩方ふ瀬路姫の舞ひ。衆物を
夥兵よ昇りて照文。信乃道節と共に。大法師よ別を告て東を投く
立。あれべ、大法師ハ沙弥念成と二箇の夥兵と。無我六本を後。門前を送
け。現留別の悲しき。賢と不肖の差別をれ。せむれ。屋をす。送るのの惆
然。ひ。を。中少瀬路姫ハ教へ。と良。出ふ袖ひ。乾ぬ旅衣。と。す。水鳥の
羽音も寒ひ霜月の廿日あまの朝興。沈む月影浮む身。西と東へ別れ路を
ひ。惜せ。ひ。是より纏ふ。旨を経て。信昌の使者甘利兵衛。元指月院を
來く。大法師が主命を述。前日對面の餘びとて。住持の白銀十枚大
山道節大塚信乃。衣裳各一襲を贈り。ふと。物み。廣益ふうち葉
なる。ひ。目録を相添て。遞与えとてける。大の國守の恩を謝り。敢あ貺物を

受を。叔父も。信乃道節。二日已前。濱路を故郷へ送り。彼地へ赴
き。豫とも。やあげ。如く渠本と異姓の兄弟を。率て巡る。されば。又う參
詮も。やうも。めがどの販物。ひそひそ。又拙禿の貴賤。とう。一錢より外
施を受ける。衆人の知所。且拙禿の抖數行脚。音とて。一寺より住持た
庵を願ひ。當院より杖を駐め。先住の憑依。依る。眞の住職。もひり。大檀
那の布施を退け。我隨をまね。罪ぬ。那所に見だ。只是出家の寢暮懲
き。素よその所。きの義をひそむ。皆えあひ。と詣。色を答まう
と。屢々。廣れど。受び。が。元の。先綱。と。二種の贈物。をひそむ。國守の
ひと。まう。を。信昌類。と。太息。啼く。彼和尚が。一錢。あそび。施物を受。と。不
足。粗淺。を。悔。う。由勘。と。信乃道節。走。と。は。憾。頬圍。を。招。約
定。魯君。か。兵。を。憐。謀。を。旋。と。鄰國。を。伐。と。肩難。と。走。と。
走。

信乃道節。が。如。を。ゆく。家臣。と。せ。の。寔。不。難。う。惜。が。べ。と。繰。返。せ。も。
今。ゆふ。嘆。息。の。外。う。う。ゆく。も。信乃道節。が。豫。と。遠。慮。の。符。合。せ。と。大
法師。へ。後。を。ま。と。ひ。先。稱。替。せ。と。見。案。了。前。韵。復。説。泡。雪。奈。四。郎。へ。嚮。ふ。躊
躇。が。崎。と。逐。電。せ。一。時。宿。所。は。送。一。置。う。は。三。千。金。を。取。を。せ。を。篠。子。山。巔。の。
ま。う。櫻。内。を。還。せ。後。を。俟。か。暇。あ。夜。を。日。續。と。ま。程。大。路。三。千。
里。廿。五六。里。と。只。二。日。よ。う。過。ぐ。次。の。日。黄。昏。八。王。寺。の。驛。ふ。本。よ。り。あ。の。地
方。へ。武。藏。る。都。筑。郡。ち。り。れ。が。武。田。家。の。封。邑。ふ。鄰。る。と。又。他。采。地。を。ま。ぎ
ゆ。く。追。捕。の。兵。を。被。ら。る。櫻。内。が。追。著。く。と。俟。が。よ。と。嫁。内。よ。あ。う。ゆ。
と。客。店。ふ。宿。り。を。討。め。檐。が。目。標。と。手。措。く。逗。留。く。渠。を。俟。ど。櫻。内。が。竟。ま
こ。と。も。既。あ。く。う。づ。る。を。や。四五。日。と。歴。す。れ。が。原。来。彼。奴。做。損。と。捕。捕。られ。言
ふ。や。う。實。ま。き。財。を。羈。れ。く。日。を。過。せ。と。悔。け。投。く。往。方。を。定。め。

とく。媼内と商量する。媼内は頭を傾け、近属両官領の没落せり。鎌倉の兵火よ甚れ。昔日の鎌倉かひを陸奥へ富栄る諸侯の城下多
く。世渡る便著す。もと奥多大崎殿の御内人也。僕が故主也。彼处へ
到る。勢をあへり。と眞實へもと薦められ。奈四郎この議ふ後もとの十一月の廿九日。あ
三四日の比ひやあわせん。八王寺の客店を朝未明か立ぬ。ゆゑび路を急ぎ登
時。媪内。肚裡よどみ。彼身の惡古又發覺れて落人となる。主の後を跟て陸
奥三界怜傳かとお糸を糸頬。甲府か在り。時ふそ主後となりれ。ま
やうすく面々の蜂を拂はず優とす。早裏ふ宿所の小簾笥ある。金を遣され
とも。ふるを以て盤纏のみ不足されがゆ。人家遠近所ゆく結果多く金を畧る
とも。落人され出祟もあらず。分別を畠毛を。脇を噬とも及んや。けふと見翼哉
す。さう。けふ。さう。どうぞ。ようやう。どうぞ。どうぞ。ようやう。
過ぎ。と心を乞ふ。見ゆき氣を慰め。見ゆき同幽する四谷の原を

過る程下呻ふるゝ。この地の當時郊原川く西南ふヨヌ麻摩河の里ある民
屋稀。陳林枝をすえ岐道多くと久畔人を迷む既而く媼内も
惡心頻りよ已と見る。あら究竟の處へとあひて四下を覗ふ事。人絶てゐる。一
腰か帶す。一刀を引抜て声をあく。背よりまで懸して奈四郎が脣と頸骨
やき丁と砍。斫られて苦と叫び。倒もとと踏畠と抜あせんととえ處を薙
け。轂よ。刀尖か又頭を砍られる。奈四郎怒れる声をちく。虎狼野心の奴
隸。敵對ひ主をうつ海の野間をぬ。世を武藏野の邊水も終ふ。脱れ身のざり。
天罰あひあせんと倭慢たまがら抜晃り。刀と頻りようち振り。斫らんと進
むを物ともせ。噫小さく天罰呼べ。人を殺せば又殺さる。報ひをかわら
ぎ。年來の好ミ。木工作を殺。方業とこの世を果て。口を喰ふ。蓋の口を喰ふ。
弥陀を念じて死天の旅十方億土獨ゆ。覺期せよと不敵の嘲嘯又發

刀歎砍伏々々十々滅を刺んとまち折る西のさうり是方を望まく来る人影は
 刀をさめく叙次つるゝとえくわせ。奈四郎が懷き財布をもと引出一と
 納切をまちそうち載た是を取れば死とも生とも要らぬ。寛哩と御座と血
 刀を拭ひ歛む強惡非道何處をもて稻叢の蔭を日柴に足の向く方を先
 路まのけ袋江五田のさえ逃亡。然程は犬塚信乃大山道節の濱路姫を
 送らんと權く巣崎照文も相俱て石舟の指月院を出よ。第三日の曉
 昔より武藏の四谷まで來よ。信乃は宿を討ん為よ濱路姫の轎子を先ら
 きまつ立まよ。とて
 二両三町人家あるえ急ぎ程ふもれ先路の枯芭花のぼとく砍仆れる
 旅客あり。近く信乃が足音の忽地小耳入りけん發起と立て刀をうち
 振り素奴婦内逃下と呼び參ら敷まとせ。信乃は騒がし身を反へて。
 利腕を楚と合ひ當め面をあや化とぞ。泡雪奈四郎。匂。犬塚信乃歎。

とれ。言語の声の中よ逃と挿れく奈四郎が刀を奪て破と破る巻の
 泪。汗が垂れ時もあらず春をぬき風泡雪が首の地上に滾落く消る枯野の草の
 葉を軀の鮮血を浸す。浩處よ道筋照文も轎子をもとをの野邊よ
 来なれ。信乃が奈四郎が爲体を如此と報知と。這奴既に深瘡を負ふ
 な眼も其處を闇みけん某をもく媼内と呼ぶ。砍をうす刃を奪て頭撃
 落す。ありまつて奈四郎の傷てる奴隸媼内が傷けられよ疑ひき仇をもひ
 まつて後悔のゆかず現積夢を報ます。とどま道筋領を彼媼内
 奴の路用の金を奪んとく所行う。奈四郎の尚死意を。御邊を首絞
 別れ。天の分配寢ま妙。奈四郎が終る所へ斯もがむとまつ奴隸のあはれ即
 主よ。汝人予とも。其を傷けく逃亡する。媼内も亦安穩さんや久後想
 像がだのとよ。照文も進を寄く。這奈四郎の姫の養父木工作の仇



うふを甲府を逐電と刑罰を脱きを本意と思食する。圖らを
ある怨を復せし大塚生の功賞を以て。且つ養父の白骨と讐敵の首級を
齋と安房へ還す。是が優る家業を。と歎く。と稱へ。船と云
云と姫より報き。濱路姫。信乃が功を感ず。かくて蟹崎照文
奈四郎が衣の袖を切取。首級を包み。鞍馬よりてその脅り。天士共侶。四
谷の里宿を投め。次の日。己の比及。墨田河の上。来かけ。登時。信乃道
節。濱路姫と照文。別を告ぐ。河を東渡。下總より。道中。身の眼を。莊助。餘の天士。
索ひ。全く。聚ふ。食共侶。安房へ到り。見参ふ入られど。不濱路姫。照
文。余波を惜しき。別を。忍び。切て。眞間國府の墓の邊。まもとを放さず
止。天士は後を立去る。と。けれが。照文。己工を。金一百両を。お。二天主

贈。やくい。この。金。大士の為。甚よ。五君の賜。之。盤纏。す。
ゆき。受納。後日の所要。用ひ。叮嚀。又。道節。沈吟。と。大塚。何と
やう。この。金。俺们。の。賜。ゆき。も。や。盤纏。よ。物。を。觸。と。推辞。ゆき。
無礼。自餘。大士の窮まる。や。君の恩。預。らせ。脚邊。あらわ。と。問
ゆき。信乃。沈吟。と。趣。の理。あ。然。か。一包金を。且く。預。む。と。
應。弃。額。うな。但。君恩。謝。され。濱路姫。二天士の績。と。譽。送別。の
を。え。か。勞。ひ。あ。ゆれ。照文。夥。兵。も。二天士。うち。對。し。僕。再會。を。契。する言
を。まぢ。ひめ。あ。ぐ。の。う。の。あ。ひ。だ。ま。の。ふ。け。い。
歩く。濱路姫。主役。渡船。うち。乗。て。前面嶋。よ。者。あ。を。二天士。うち。岸。よ
き。よ。す。み。あ。ち。まぢ。ひめ。て。か。あ。へ。よ。き。久。あ。よ。か。安房。の。瀧田。よ。還。の。よ。比。大父
義實。朝臣。三親。義成。御支婦。と。男女。胞兄弟。達。か。甲斐。在。年。來。
ゆ。も。告。の。う。木。作。が。大塚。信。乃。妻。せ。と。欲。せ。と。信。乃。が。結髮。の。妻

濱路がり。そが冤魂のゆゑど恥じひ生ひてば義寛も差成めつやくとひなれ
ぞ。照文（あらわし）もこのゆゑを知りて絶てまづけ不題大田小文吾恵順。大坂毛野は
やんとそ是裏に鎌倉赴き。毛野其處も在らず。絶て往方あるよきれ。
伊豆の山家を索ひて下田船の便を討め。水行よ風暴れて破船と伊豆の大
嶋よ繕ふと。兩二月稍遅て解る日。又惡風。吹流され。這西二宅嶋。著る
あらぬ四地へ遠れ。帰らんとむよとを。罪うて見る配所の月。慰めの如吾
影の外友。枕磯山。音のまれど。風の便も絶果て。嶋よ在る。既よ
あく。一ト稔（とせ）あまよ及び。比浪速。歸る高瀬船の難風を避。そ一日あの嶋ふ
歇（とま）。よき告相譚よ。その船人よ伴れ。舟もくけぬ浪速津。幸くと著に
け。身のをうち。疲れ。有馬湯治。南都左鬼よ保養。そ年を空ふ
暮。次年春より。北陸道遊。又一稔石濱の厄難釋。鎌倉
次國太。地方の壯校頭領。稱られて鬪諍の和説。立入。至り。事す。
先が當時。の地方の習俗。盜竊密丈の悪事。ゆえり。人の害よ。あるの
ま。御の壮校。これを捕。活を殺さ。神慮任。命じる私刑。行ふ
恒例とせ。神慮任。小千谷より十町。大藩山の。庚申堂
あり。近頃。大く頽破。その神像。亡く。堂は荒。供え。人の憩所。小
遣。徴。三夜。死。死。死。死。釋却。追放。死。死。死。死。骨。平隈河流
しき。あらむ。恐木。怕れて他御走り。御中久く。置。間詰休題。

却説龜石屋次固太おだい。小文吾みことが身長みだり人ひと倍ひ。骨逞こねご力士からしめめ方かたををそ
稱賛さんせん。角力すきひの物ものががうそうそ程ほど。小文吾みことも素すより好すむ技わざ。然しかるも凶公きゆうこう
衆まと論辨讓ろんべんじようる。次固太おだい駭おどろを感服かんぱく。歎待たんたいを増ます。既すで
幸さい小文吾みことの日ひあと別べつを生うまし立たましととけ。次固太おだい頻ひんりり推禁すいきん。既すで
往むかの三さん氣き。當とう國くに古志郡こしぐん一千村せんそん。毎年二四月にしやくの比ひ或いわく刃の日ひ或いわく寅とらの日ひ吉よ
辰つとト定さだて角突かくつきと倡うながす。鬪牛とうぎゅうの神かみ支え。今茲あさ隔は明日あさ與行ゆぎょう。既すで定さだ
彼かれを。生うまし何なん地ぢ。且よ退しりぞ申まこと。便びん宜ぎや。小文吾みことを。既すで
うら悔うらまく。某もし嘗なま舊きし昌里まさり。在いた。博識はくしき來き。胡こ國くに。鬪牛とうぎゅう。原はら
是いは西戎せいじゆう。戲あそ。唐とう山さん戰たたか。國くに。時とき。武ぶ。講こう。禮れい。增ます。此こ戲あそ。樂うた
や。方かた二人。牛頭うしの戴くわ。兩ふた相抵あた。勝負かつぶ。秦ちん。國くに。胡こ。近ちか。之の。樂うた
二世にせい胡こ。角かく。船ふな。好す。漢かん。武ぶ帝てい。時とき。追お。臣しん。張ぱ。騫ひ。初はじ。西にし。到いた。む。

此こ始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ。一いつ世せい及及。漢かん武ぶ帝てい。角かく。船ふな。好す。此こ。始はじ。武ぶ帝てい。又また角かく。船ふな。戲あそ。化かわ。日ひ。今いま。角かく。船ふな。權けん輿よ

本日の定牛と。弥生より飼料。生糞。粉をよく打て餅を食ふ。
既に本日の定牛。牛の澤とせんと。蠅種或油雜巾り。幾遍とき拭ふ
程。毛色日比十倍して就中黒牛の天鵝絨をす。包は如く彼羽毛芥子せ
よ。魚雷。圓の鬪鶏。想像されて。勇一。北圓の沿習也。戸々。牛馬が
初冬の比より多く。明年の三四月まで皆是厩檻。馬は籠られて外は歩るのみ。
されば秣。足。乳。養。肥。太。足。空。况鬪牛。牛。牛。牛。畜
物の費用も敢厭。妻。子。奴婢。牛の為。心。用。房。鍾。愛。月。比。弥。增
たり。有此而本日。ふ。れ。磨。石。立。牛。共。各。牛。蔬。屋。よ。牽。出。畜
生。それ。毛。の。意。を。浴。欣。然。と。前。足。を。履。大。地。よ。蹴。立。る。奮。勇。力。の。氣。顯
き。牛。の。南。部。の。牧。見る。罕。ゆ。佐。渡。ち。地。牛。の。毛。色。も。一。る。ら。私。黄
牛。蒼。牛。黑白。桃花。四。足。白。虎。文。額。白。牡丹。紋。六。出。樣。との。雜。毛。も。あ
辛之助。小栗。山村の判官。八。九。牛。牛。最。取。手。拔。俗。大。閑。と。稱。只。五

さあ。か。枚。舉。る。手。追。わ。び。又。形。體。も。大。小。あ。臂。力。勇。猛。を。差。あ。れ。今
字。う。い。ひ。け。れ。よ。這。田。の。大。牛。が。逃。入。村。う。角。連。次。牛。田。村。う。孟。右。勝。
虫。龜。村。う。須。本。太。郎。木。澤。村。う。榦。之。助。蓬。村。う。艾。二。郎。塙。谷。村。う。勝
牛。蒼。牛。黑白。桃花。四。足。白。虎。文。額。白。牡丹。紋。六。出。樣。との。雜。毛。も。あ
辛之助。小栗。山村の判官。八。九。牛。牛。最。取。手。拔。俗。大。閑。と。稱。只。五
の。三。よ。あ。ね。ど。お。ま。ご。ア。レ。大。畧。へ。又。あ。村。落。と。出。る。牛。奴。を。力。士。と。唱。て。究
き。ヨ。う。を。あ。い。こ。ん。あ。あ。え。ま。あ。い。セ。し。ん。り。翁。を。あ。え。い。て。の。み。
竟。る。る。壯。少。者。或。紺。染。或。花。田。の。山。夾。衣。よ。紺。の。股。引。脚。絆。を。穿。牙。ぬ。又
附。融。と。の。を。穿。る。も。よく。あ。又。甲。ゆ。も。革。を。畫。し。く。或。ら。榜。の。絳。纈。
纈。ふ。或。ハ。蒼。く。或。白。縁。を。さ。め。ぐ。と。ぶ。る。の。う。肚。甲。火。郡。内。縞。絹。纈。
半。故。ら。美。を。畫。し。て。帶。踏。皮。副。帶。を。拭。ま。ぎ。く。風。流。戎。上。日。と。せ。一。草
鞋。白。紙。を。緋。よ。拵。て。紺。の。麻。索。を。す。く。匂。と。せ。一。の。あ。日。を。晴。と。裝。做。ま。が。
七。八。十。名。も。あ。ぬ。べ。ど。中。よ。木。澤。村。う。雪。車。九。郎。荒。屋。村。う。漏。右。馬。逃

入村。又跣四郎。小栗山村の妹右衛門。あれら宗徒の大力士も。金と牛を
犠。又牛裁判となり。ものあつて東西の力士共。倘争ひを起せど。あひれぬ
まを和寛く。參異お治むるを宗と。牛の名を被せ。某村の甲右
衛門。村のし八きど呼ぶ。地方の習俗。彼の名の名馬のと。別名つる
と。松隔。明日真行。闘牛の地所を討る。塩谷木澤両村の境
節。逃入荒屋。虛木の二ノ村の合保。其地を借く當場とせ。との
地へ三方小山。その凹坦然。佃圃を借く。絶と。あひ遠近。連
山。抹刈て。藩山。草葉。萌出處々。斑消。遠山。雪。不
霞天。引く春色。今。ちふ。珍しく枯結縷草の上。筵延布渡。出茶屋
あり。酒舗あり。蕎麥園子。煮豚物。餅。駄果子。粥。下日の
為。かくと。知。鄰御鄰郡。久がれ。遠。壠の老弱男女。然ん
う。

とく。あひ取衣ひ。あひ。金高。見あろ。金と。岡よ。依。能徊。抑
絶。億萬人。あひ。宛塘。渡る。豈。似。彼牛裁判。補助人。など。
中。不。難。り。く。異。あ。と。い。れ。を。鎮。む。力士。處々。小隊。を。あ。又。看官。の。中。ふ。今
吉。の。平。坦。ひ。數十間。あ。四。下。を。彼。此。と。徜徉。を。久。く。雪。不。困。筋龍。う。れ。す。
穀。の。牛。ハ。野。邊。珍。う。け。ふ。肩。轂。余。れ。く。敵。互。を。あ。そ。の。大。を。す。の。ハ。高。サ
キ。尺。二。寸。四。五。寸。や。も。及。ぶ。や。鉢。膝。と。名。つけ。る。角。の。飴。へ。排。の。縮。緬。或。へ。紅
る。圓。統。の。幼。を。と。兩。角。互。減。み。る。と。事。の。為。体。首。を。放。駕。さ。ふ。の。も。す。
か。そ。で。牛。ハ。期。と。俟。自。小。折。々。高。く。吼。る。声。物。然。と。と。犧。々。ち。介。の。葛
蘆。ふ。ゆ。ぶ。れ。何。と。よ。ら。ん。よ。と。知。ら。ね。舒。音。響。見。霞。霞。と。辟。く。彼。淮南。卦。干。と
舐。く。雲。入。け。ん。勢。ひ。あ。月。小。喘。だ。呉。牛。央。似。ざ。う。も。あ。づ。る。海。内。安
雙。の。壯。觀。へ。松。角。力。の。光。景。と。衆。牛。の。勝。負。へ。本。日。と。俟。く。行。て。元。あ。へ。る。

訥諱あはへん。又盡つくして之をひ送せらるまつせらる。是九牛きゅうぎゅう一毛いもの鳴呼めいこ。素す急あはへく旅たびをねがひ。之を隨ともて遠とお苗なせんと忘わすく。日ひと候まわ程ど間ま縫ぬつふ一日いちと置おきく。牛うしの日ひ未み明めい。時とき小文こぶん文明十四年。壬寅にんゆんの夏なつ四月初旬しょじゅん天あま晴はれ長閑ながのん。小文こぶん吾わ未み明めい。起あがく。下くだの案あん内ないを催促さいそく。登時とうじ次つぎ園太えんば。小文こぶん吾わ未み編へん。吾わ御ご。杜校トクセイ。ホガ川口ホガカワ人ひとと鬪諍とうぜいをあがて。とむづく。今いま朝あさ報ほう。是これ今いまゆく不默止ふもくし。かれが僕わたくし件ことの者もの共ともを推鎮すいちんめく。和睦めぐらわをとどま。されよ。今日けふ。既すで供そなへ立たつ。僕わたくしが相模さがみの弟子しす。鮫守磯さめもりいそ九郎くじゅうと呼よ。あり。寓居よき人ひとで。之これが認のそとをとどま。渠渠案あん内ない。渠渠も亦よ土地じちの人ひと。粗ざら知しれ。されば。假ま廢ひを取と。又また。経き僕わたくしも。渠渠も亦よ土地じちの人ひと。

是これ義ぎを允ゆきき。之これを小文こぶん吾わうわゆゆ。そそは送憾そうがんなる。勿も論ろん。新殿しんてん角突かくつきを幾遍いくべんもあひけん。所要果かく遲おそくとも來くわるべし。こ應こおこを。是これ次つぎ園太えんば。欲ほびく然ぜん然ぜん。早飯まいはんをまわせん。僕わたくしが彼かれ議ぎを就すく。今いまよ被は處しよ。事ことも。許ゆさまよ。と遽とつげ。外ほか面めん望ぼうく。先まづ。早飯まいはんも果こづ。鮫守磯さめもりいそ九郎くじゅうへ。准じん備びの偏提へんていと一卷いつせんの革かく笠とうを肩かたから。被はく。一刀ひとを脣くちば。大刀おほのを。偏提へんていを立たす。磯九郎いそくじゅうが先まづ。塩谷しおや木澤きりの兩村りょうそんの境さを投なげして。之これを。既既而より。小文こぶん吾わ磯九郎いそくじゅうを。御道ごどうす。千隈河せんくいを舟ふね渡わたす。千隈或も平曲ひやく。一名めい信濃しんのう河か。魚野川うそのが落おち合あく。北幽きたう中なかの大河おおが。之これの河かを渡わた。果こく。又また數すう町まち。相川あいがわと山村さんむらを過くわす。あらまを。山路さんじゆ。或も陟のり。或も入い。降おる。是これ角突かくつきの地じ所し。是これ二里にり。あま。と。休やすま。暇ひま。

争。とくとく彼四は曠坦なる鬪牛の地所より至れば必ずも取合ひて老弱男女
あ日を晴と壯衣做へうぞの衣の色々る花の如く丹楓より妖艶とく美不
を北國の風土ゆき桃桜の花まよ入只一時よ綻びて彼此よく白方の扇翠華を
會む楊柳の糸よ遊糸よ鳥春景色 北國の春色 鹿兒斑は消残は白
雪も亦愛す。あ日は雨後の晴天を一朶の雲まく猛風發き連山の波濤
似方青葱とく蒼れあり白蛇もあり尖くぬ。晴窓既よ霞眼を能め確道
稍春深し人聚りて岡を高く鳥啼く谷の深を知る寛止て到る處
ぬあら毛といふタヌケて磯九郎は正面を岡の邊に革半分延を布儲て小文吾を
上座ふ請登。お身の傷ふ扈後に向き工を具ふ答ひて正首ふ尉がり
然程よ鬪牛の時刻もさうけれ村人各々彼紫敷を置く牛共を漸々に牽
と牛と迭々勝負を決せむ。その古文の為体今之相撲の土苞入攬組と云ふ

E
異うす且の牛と牛とを闘ふと矣。東の某村のム右夷西の甲村の乙兵衛
と呼ふ名告く看官よれを知む初形體巨大を肩力飽き猛々ぎる。
牛をこれ闘ふ中大きも又小きも強きを弱きぬ前頭ふ牛を闘ふ。後
大関小結と唱らて大牛の強勢を闘ふと亦是今之相撲の如く既ふと
一番二番と勝負を争ふのを終ふ且東西より牛主各一頭を牽ふ。牛
牛と牛と相距をもて間若干大力士赤牛摩を解放。双方齊一
奔蒐を角を突合するもあらず。或は迭々疾視て左右を蒐ら。相違ると
數回かく角を突合するもあらず。或は迭々疾視て左右を蒐ら。相違ると
摩を解くと。一隻の角を田を鋤た圍を打て。大地を數回蹴歩進
三と角を闘ふ牛もあらず。敵を進み。俄然と逃る。大きさを牛
摩を解くと。相進こそ角を闘ふ牛もあらず。逃る。膂力の捷れ牛の推

戾一衝返され漸く眼中含血く朱を沃てるゆき如く全體より汗を流し四箇の角を闘争する音戛々と遠く響えり持角の勢ひ怕ふべ又み段重強牛ども組で離れを氣へて突くも勢ひ迅速ゆく舛く突外き忽地眉間を劈かれんとする目危く也れぬよく煅煉と愆ひてゐ一就中大牛の脅力大象は敵まゝの角をも投げ更に角を突殺まぐ不見えると力士亦群鹿推隔々捷誇である牛を駆む事及びと柱ばれが眉牛ハ脇を突れや矢庭を繋ぎれざるを一角の銳きと鋒のどくとの勢ひ並前よ似てゆる故に東西の力士七八十名坐絶の四方を輪立と闘牛の五間十間衝然とく推移と在り力士も共に山辟れ動散々縱横首尾は奔走されが勝色を奪牛々の力士们的金欽を當せ鳴り推ゆ牛は後く只洪波の打ぞく走る群集の老弱瞬を失ひ彼や肩も既小も弱り見る

と相憐毛も汗を握る。各見は肩を並べ牛角の勝負を争論。孰が彼牛裁判を男東西の力士も涉ゆ。商量して牛主と見は肩のれを和寛毛も強弱の差あどども既に肩色はる。牛は忽地角を退外して其勢直に逃走す。夥の力未動搖々と追蒐々捕るを手柄となり追ふ。と遅居と之の逃牛遠く走る。郊原田園の差別。山林嶮岨の嫌忌る樹を倒し石を輶を勢ひ名状もへぬ。况勝牛のれを逐す。勇猛奮震十倍。當るもやうござる。其の技不熟する力士ホヘ牛の左右拘ら。横たわる。身を横とめさせ。角を両もす。楚定と握る。牛の前足をつか足りて絡まく。背ふ尻を蹴るもや。或の牛の後足を携著足或ひを尾も握乃て曳く。吊れ。駐る。あれやも優る大牛の暴氣くせん。従ふる。牛の罪も。兩もす。相く引。駐れ。す。辱す。怯む處を毛をもく糾る。牛麻縄を雞の羽を

のく鼻ふ融せ。鎮もとひこと。有此而絆索を數々添ふ。人夥と牽
を返す。牛の意氣揚々と勝誇する驕慢の氣色。この時小顕れ。吼る
声。年々うる力士。手元をうち護り。齊一凱詞を揚る。山谷相答へ。
勇力。とひも疎へ。或入牛角の勝負を果す。一方の牛。ちぢ弱る。
其方の力士。帖々引分を欲す。敵を力士。手聴せ。て。ひまぐしく呼り
て。範の四方を達す。相撲の行司。彷彿。かくる。勝負を牛の雙
方の力士。手和諧と。大勢入。推隔。辛くあく引分を。牛共を肩飽
き。迭す。突を走り。蒐るを力士。手ひ殿を旋じて。敗又鬪。せせ。竟小牛
摩索を引融と。牽く。舊處。到す。兩牛。欣々然と。自負。まゆは。仰
氣色。あ。迭不肩故。さく。危。その。男。三正。も。う。や。れ。ば。這數十番。す
勝負の間。観者。宛醉る。如く。憄然。うて。食と。寝。愕然。と。膽を落し。

日の傾くを。覺ゆ。奇可。妙。と稱る。声。彼處。鳴る。海の如く。又遠山の雷
波く。似。實。是北幽中。の。比。名。物。宇内。的一大奇。觀。次。固。太。物。之。方。段
を。見。度。この。公。扁。の。左。詳。か。下。程。ふ。大。田。小。文。吾。あの。幾。番。る。鬪。牛。を。観。く。且
散。鶩。に。且。感。下。現。無。智。の。畜。生。や。敵。ふ。あ。ま。段。あ。史。記。ふ。所。云。角。祇。の。モ
義。を。あ。よ。會。得。せ。り。奇。妙。か。ア。そ。と。嘆。賞。まれ。磯。九。郎。微。笑。く。某。る。六。角
突。を。今。茲。で。二。び。釈。れ。も。與。あ。底。と。ひ。こ。す。られ。が。牛。の。主。方。の。角。突。の。前
方。あ。東。を。み。る。月。よ。朝。夕。神。厨。燈。燭。を。献。り。く。コ。が。牛。の。捷。を。祈。る。の。隨。小。勝。得。く。歸。れ。
濁。酒。を。釀。餅。を。搗。く。賀。席。を。開。る。その。村。中の。老。弱。を。送。り。招。り。管。待。を
と。あ。あの。角。突。の。肩。方。牛。へ。敵。み。の。牛。を。後。り。き。を。認。忘。れ。め。大。約。20。村。を
と。あ。た。を。ぞ。深。雪。鄰。郡。よ。弥。増。せ。高。山。里。え。れ。樵。咯。能。徑。と。険。れ。處。え。れ。ふ。る。米
栗。と。肩。柴。新。肩。方。牛。と。牛。の。行。遭。る。途。を。讓。す。由。る。を。この。角。突。裏。て

後肩方牛のやうき。敵の勝牛にあふとて、頭を縮め立駐り。これを避む。とてこよ。又双方甲ひるぎ。牛はあとりとも途を譲らぬ。あまく總て牛。奴のみを勞せ。よくとくやく。自然の勢ひ。と話す。小文五ひく感ぞ。送す番ひをよる程。唯の大牛一一番毛。けの結角と度見る。一方へ逃入村の角連次四尺六寸あり。と。黒牛の骨逞しく脂満々磨立。もの澤ハ現天鷲絨。異う。その角の長く鋭。彼石劍を欺くべ。又一方ハ虫亀村の須本太牛。高サハ敵の牛ふ優て。四尺七八寸あり。と。連錢革毛と。毛先方の雜毛。多く鱗。似。その角は鳥犀を欺た形。耕牛は敵矣。眼は紫銅の鈴。と怪しき蹄。冶する鐵。ふ似く。實は象駝。も伏毛。充勢ひ。あし人僕。これを観。そ。毎月を以て。目を驚かす。とす。登時磯九郎。又小文。五京耳。其の須本太牛ハ龍種。初。牛主の家。逞。と。牝牛。

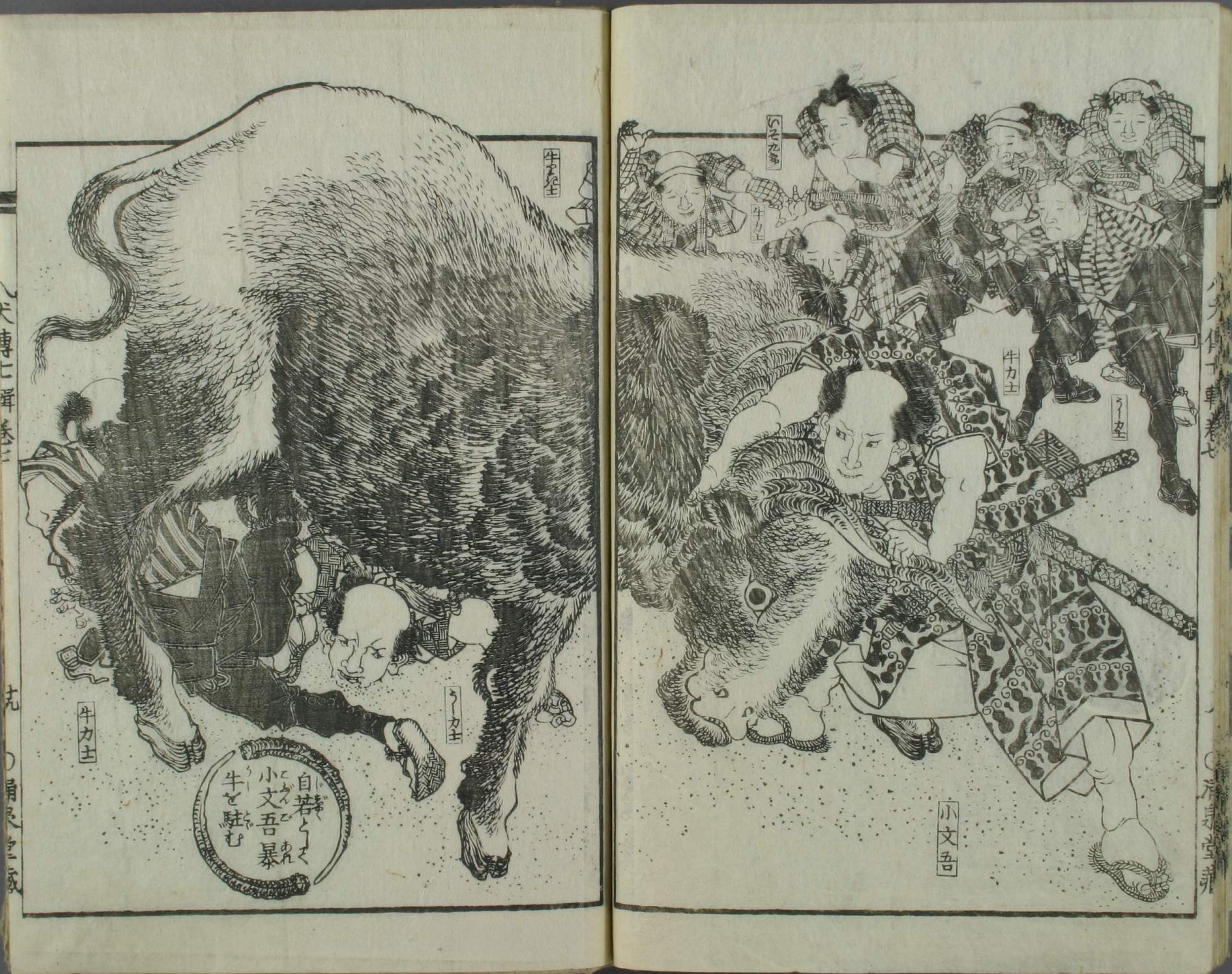
あけり。一稔夏の比。家の牛。奴。元。新。肩せん。牽く。深山小走。牛を水澤のほとり。樹下に敷。系置。と。身。彼此と。受け入。終日。坐。川る程。水澤の中。よろ雲起。晦。暎と。黑白。牛。奴。憐。慈。ひ。あき。ふと。だらふ。恥。樹蔭。走。躊躇。兩。避。ん。と。程。且く。云。あれ。霧。澤邊。小走。牛。や。聊。異。する。も。但。龍涎の如。の。流れ。牛。ほ。よ。あ。と。龍。精。え。と。その牝牛。孕。む。三。月。満。産。る。横。今。開合。彼。牛。現。形體。大。死。る。面。魂。猛。か。見。え。雜毛。鱗。似。是。龍。種。されば。當。國。守。長。尾。駿。緯。の。ト。守。食。件。牛。徵。れ。牛。主。惜。進。を。今。茲。五。六。歳。や。う。づ。らん。け。の。壯。觀。只。是。の。意。認。く。ア。セ。と。と。小。文。吾。微。笑。あ。牛。の。異。様。え。が。龍。種。と。説。信。られ。現。怪。有。の。奇。物。又。敵。の。

外傳十卷

清身堂

黒牛も尋常の物ぢやあらむ。かくと観たる所とて、とてゆくをもて推向處。
膝は片々を突き、勝負甚麼とする程よ力士ホの件の両牛を東西より
牽ひせても、聞せんとありて、大力士ホ推禁めぐらす等の人々須本太へ
龍種へ又角連次も二十村ゆく管えず暴牛へ聞まし失あると云ふ後悔
其處は立てア已ねくと制まざ力士がらく東西うる牛主これを止肯がぞつゝ
麵由る事あらば、俺们がこの牛、けの角力の結局うる今聞せぬあく已
と云ふ始あく終る。番組全うむしハ神慮もあくよ測り、余ア度べ死爲
の事あら。鎮守の神の祭祀するを今うち附む事ある。孰ふまれ肩色元
え氣。諸懸りよあく引分ふ。まぶりのあがだや、と聞せよと敷圍みを裁判人
ら立ち入りて、まづおうれ聞まし後引分え。とひよ大力士六争ひをく然
らぶとく聞せよとひよあく力士ホの両牛の牛繩を離双方互に解放

某群集の衆人これを歎んと。前より進むと覺え。後より皆立て。前より人の高を罵る。声貫々と拍擇せり。然程須本太角連次の大牛へ。迄よ敵を悟と。もづま進み近つた。霎時呼吸を揣るが如く。又その透と窟かゞ如く頭を低く脊をなぞく。睨あと半晌なり。各々の圖や。も。忽地角を突合。推。推れり。桃を。汗。流れ。四足。脚。蹄。踏けん。駐めく大地。滅。含血る眼。燃。暴。怪。鋏。做。頭骨。折る。然と。す。組合。揮放釋。又。組合。と。勝。双方の角の音。戛然。と多く。拍子。達。至。互。推。推。又。推返。勢ひ。力士。亦。奔走。多く。或。抗。抗。を。撥。各々牛。勢ひ。賈。勝。肩。程。角。連。次。少。疲。既。危。え。大。力。士。声。被。疾。引。分。と。叫。ま。す。東西。力士。數十名。簇々と。走。推。隔。分。れ。角。連。次。隙。路。



討て逃歸を。須本太へ急脱下と。甘奮直追蒐るを。力士も透きを携
著く。捕縛にて。須本太弥怒狂で。角も突破け空も。投飛反
倒も。勢ひ當て。され技も熟する力士も。駿驅だ。辟易して東へ嶺れ西へ
靡く。周章大さう。居り。然程も。須本太の角連次を。索難て。昇登
虐る。され四方よ狂巡り。人を物も當る。任して角も。戦ふ。
猛威も。怕る。群集の老弱東西よ奔走。南北よ逃迷。出茶屋酒店
果子菴麥の牀几。葭簾を踏漫まきて。只膽と鎌を可。され小文五郎と
磯九郎の逃る衆人。隔られて。迭々索り。追ゆ。やがて。然けれども。小文五郎。此も
騒ぐ氣色。岡の下る小松の邊。磯九郎と。俟程も。突然と。走つて。須
本太。小文五郎。樹木を。身を。内に。立て。角を。楚楚と。捕まつ。畢竟。小文五郎。
暴牛を推駐め。後の話説り。ふぞ。そと第八輯。解分る。聴経ゆ。

曲亭主人曰。這個の闘牛の光景。越後魚沼郡塙潭の里長鈴木牧之が。庚辰の
春二月廿五日。彼地に到て。目撃する圖説。申す。抑闘牛の一奇事。越後雪譜
中載せる。每歲筆研繁。是も。是も創始ふ。追ゆ。且老歩旅。老
數の故。ひま。彼州よ遊ばれ。是事足ら。歲月を歷す。あの故。牧之の企
望を空くせ。言のあふ及ばず。寫眞の圖。と。卷の五の筒端。お見えたを。
又曰。予が著する冊子物語。三三十年。及ばぬ。その刺板若干散失。余り
校訂を乞ひ。遼。書を易文を衍脱して。再刷。まわ。やと。云ふ。所云括頭巾
縮緬紙衣化競丑ニ鐘。あの他。不。あ。よ。や。予が名號。あ。と。云ふ。補刺
予が校訂を終。他人の。も。成。る。の。看官の為。ある。こと。を。の。の。

里見八犬傳第七輯卷之七終

○著作堂手稿里見八犬傳第七輯画者筆工目次

出像 卷ノ一二三四

并卷ノ五鬪牛圖

溪齋英泉

漢

出像 卷ノ五六七八

柳川重宣

漢

淨書

卷ノ一二四五六

筑波

仙

橋

卷ノ七

谷

仙

川

○著作堂新舊國字綉像小說涌泉堂藏版畧目
里見八犬傳 初輯 第六輯迄

三十卷既行

同 第七輯 本編七冊

あの度出版

勸善常世物語 全五冊別入補刊

本稿依之舊本

南總里見八犬傳第八輯

八犬傳一部の小說自後一二輯小小
結局大圓圓ふ至るべく來刃の春出版

尼子九牛一毛傳初輯

八犬傳滿尾の後引づき彌刻せん
るふ翁ふ乞うのと遠くモ刊行せん

右曲亭翁半世の才力を揮ふ所の新奇八犬傳本伯仲を冠繪入冊子物語へ涌泉堂謹識

神功皇后

御鎧袖藥

神僊

明湯

一包

價百銅

本家調合所 大坂心參櫻筋

京都出店

三条通東洞院東入

小傳馬町三丁目

丁子屋平兵衛

文政十三年 江戸書林 小傳馬町三丁目

寅正月發行 大坂書林

心齋櫻筋博芳町北入 河内屋重太郎
河内屋長兵衛

